2023年8月6日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

大胆に罪を犯せ

［創世記4章1節～16節］

さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。主はカインに言われた。「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。主はカインに言われた。「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」カインは答えた。「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」主は言われた。「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる。」カインは主に言った。「わたしの罪は重すぎて負いきれません。今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となってしまえば、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」主はカインに言われた。「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう。」主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けられた。カインは主の前を去り、エデンの東、ノド（さすらい）の地に住んだ。

[1] 8月は平和を祈念する月

8月は平和を祈念する月でもあります。丁度今日は78年前に広島に人類最初の原子爆弾が投下された日でもあります。しかし、昨今の色々なニュースを聴いていると、核についての危機感が急速に落ちてしまっているように思えてなりません。「平和ボケ」なんていう言葉がありますが、私たちは、私たち人間の「罪」に対しては鈍感になりたくないと思います。今日は、広島のこと、また長崎のことも祈りに覚えながら、礼拝を捧げて行きたいと思います。

[2] 身近な存在・カインとアベル

今日は創世記4章ですが、有名なカインとアベルの物語です。人類最初の殺人と言われます。ここでよく問いに上がる事柄があります。カインが弟アベルを殺したそのきっかけになった、神様がアベルの献げ物は受け入れ、カインの献げ物は受け入れられなかったのは何故かということです。これについては私は必ずしも納得できる説明はないのではないかと思うのです。創世記を見ると二人の献げ物そのものに〇や×があるようには私には思えません。確かにヘブライ人への手紙11章には「信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって正しいものであると証明されました」とありますので、そういうことなのか、或いは、その献げる時の心の姿勢が違ったのか、と言えるかもしれませんが、あまり杓子定規に考えるのは「こうしないと神様は受け入れてくれない」という新しい律法を作ることになりかねないので、私は「謎」のままで良いのではないかと思っています。私たちの人生は、納得できない“不条理”なことって山ほどありますし、私たちは様々なモヤモヤを抱えながら生きているということがあると思うのです。そしてまた、私は今回ここを読んで思ったことは、カインの嫉妬心とか殺意というものも、きっかけになったのは、神様への礼拝の場においてだったのだということです。アベルは受け入れられ、この私は神様に受け入れられていないというような思い。それが彼を苦しめていたのかもしれないと。そいう意味では、カインという存在は私たち信仰者と身近な存在ではないでしょうか。

[3]　他者を殺すことは、自分を神様に置き換えること

創世記は、初めの人間たちが登場して（アダムとエバ）、すぐに彼らの間に生まれた兄がその弟を殺してしまうという悲劇を語る訳ですが、ここに甘くない人間理解が示されていると思います。人間とは、人を殺める可能性を持っている存在なのだということです。そして、このことは先週見た、人間が禁断の「善悪の知識の木」の実を食べてしまったということと深く関係していることだと思います。彼らへの蛇の誘惑というのは「神のように善悪を知る者となれる」ということでした。これは、自分が人間であるという立ち位置を逸脱して、神の位置に自らを置くということだと思います。「私が神になってすべての判断をする。私が正義だ、私が警察だ」ということです。ずいぶん傲慢に聞こえないでしょうか？しかし、それが「善悪を知」ってしまった人間のなれの果てです。基準が「神」ではなく「私」になるのです。決して「私」と無関係ではないのですね。

先週、蛇に誘惑されたアダムとエバは、いつの間にか信頼関係を失ったこと、誰か別の者に責任を転嫁して生きる術を身に着けたということを見たと思います。これまで抱いていなかった不信が入り込みました。相手が疎ましくなりました。罪は、「自分さえよければOK」という価値観をもたらします。ですからこの自分が脅かされることに耐えられない。誰かの下になることが許せない。神様が自分の軸に居ないから、いつも比較の中に生きざるを得ない。「嫉妬」というのは、仮想敵を作るようなものかもしれません。“この人が居なければ私は脅かされない”という幻想を作り、その者に対して殺意さえも抱いてしまう。この人は存在して欲しくないと。…私は自分自身の内側を見て思います。カインのこの事件は、決して他人事（ひとごと）ではない、と。

[4] アベルの血以上に力強く語るキリストの血によって

悲しいかな、カインは遂に楽園の外の野原で弟アベルを殺してしまいます。殺す者と殺される者。どちらも悲劇です。殺人とは人間的にはもう取り返しがつかないことです。ですからここで“怒りに身を任せることがないようにしましょう。他人のことも思いやって考えましょう”という結論を出すことは簡単なことかもしれませんが、聖書はその先を語っていると思います。神様は、この殺されたアベルについて、「お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる」（4:10）と言って、死んでしまったアベルの声を受け止めているのです。アベルはちゃんと神様に覚えられている。そして、カインもそうなのです。確かに神様はカインに、「あなたは地上をさすらう者」（4:12）となるという厳しいさばきも語りながら、あなたを撃つ者がないように、彼に神のしるしを付けられた（15節）とあります。神様は、この孤独の極みの中にある殺人者も放っておかれないのです。これは、「赦し」ですね。人間は「不条理」の中でモヤモヤしてとんでもないことをしでかすことがある。しかし、神様はその者を殺さないのです！これはある意味、理屈に合わないことだと思います。しかし、これが聖書のメッセージなのですね。

私は最近、ある若い大学生の証しを聞きました。彼女は小学校5年生の時に洗礼（バプテスマ）を受けられたと云うのですが、上には三人兄弟がいて、皆が優秀で自分は劣等感が強かった。兄弟と比較しては、自分を裁き、自分が嫌いで仕方がなかった、そういう苦しみを抱いていたと言うのです。でも夏にCSのキャンプがあった時にイエス様のメッセージを聞いた。イエス様は十字架にお架かりになるほどにこの私を愛して下さっているのだと。私は自分自身が嫌いで受け止めきれないけれど、イエス様は自分が嫌いなこの私を、このままで愛して下さっている。教会学校の先生と一緒に祈る中で何故か涙が出て涙が出てしょうがなかったと仰っていました。小学生でも、自分が受け入れなくなってしまうし、またイエス様の愛もちゃんと魂に届くのですね。

創世記4章、神様は、罪を犯して彷徨うしかなくなってしまったカインに対して、なお生きることが出来るように、神様が道を整えて下さいました。これはもうイエス様の十字架の先触れだと思います。私たちは、罪を犯さなくなることが一番大事なのではないと思います。私たちはアダムとエバの末裔で、弱いのです。あの主の弟子たちも皆そうでした。イエス様を見殺しにしたのは側近の弟子たちです。またその後に出た使徒パウロもイエス様が大っ嫌いで、殺意に燃えて教会を迫害した人物です。しかし、この弱く自己中心な者たち、当時の群衆や宗教家たちも含めた者たちのために、主イエスは、十字架の上から神様に祈られました。―「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ23:34）と。罪を犯し続ける私たちに対する途方もない執り成しの祈りです。主はアベルのように、いやアベル以上に血を流されながら、主なる神との関係が切れないように、私たちのために祈って下さったのです。これがキリストの愛です。

私たちはこれからだって、なお罪を犯してしまうことがあるでしょう。でもその時に顔を上げる場所を持っているのです。神様はカインに「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか」（4:6）と呼びかけました。主は兄弟を叩く前に、自分に体当たりして欲しかったのです！私たちの救いは、自分の中にはありません。主に差向う時に救いが自分の中に起こるのですね。私たちは大胆に神様に目を上げて良いのです。

私は今日の箇所から、あのマルチン・ルターの言葉を思い越しました。これはルターの盟友メランヒトンに書かれた手紙の一部です。

「あなたが恵みの説教者であれば、作り物の恵みではなく、本物の恵みを説教しなさい。もしそれが本物の恵みであれば、作り物の罪ではなく本物の罪を負いなさい。神は、作り物の罪人を救われはしない。罪人でありなさい。大胆に罪を犯しなさい。しかし、もっと大胆にキリストを信じ、喜びなさい。」

…私たちは皆、カインに並ぶ存在で、罪から逃れることは出来ない罪人です。それを謙虚に正直に見つめたいと思います。そして、その上でたとい罪を犯しても、この世界には「十字架」という命の木が立っていることを信じ、「罪人でありなさい。大胆に罪を犯しなさい。しかし、もっと大胆にキリストを信じ、喜び」ましょう。この主の許に、8月6日、この朝も立ち返りたいと思います。お祈り致します。

主なる神様、あなたから離れた時、私たちは何と惨めな者でしょうか。しかし、あなたの愛は大きく、いつでもその愛の懐に立ち戻れるように招いていて下さいますから感謝致します。今日は、広島の原爆投下を覚える日です。どうぞ、真摯に祈る心をお与え下さい。私たち自身の内側から「平和」を始めさせて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。